
ブランコのある公園

Z - 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランコのある公園

【Nコード】

N3933B

【作者名】

Z-1

【あらすじ】

小さい頃から走ることが大好きだった千春。父親の転勤で東京へ引越し、新しい生活を送りはじめる。そして、少しずつ大人へと近づいていく中で、彼の中にいろいろなものが芽生えていく。ちょっとユーモアある母と気難しい姉と怒ると怖い父を持つ、明るい少年のそんなちょっとした物語。

第1話：東京へ

彼は小さい頃から走ることが大好きだった。

永遠と田んぼに挟まれて、遠く続いているように見える道をただひたすらに走ることが。

彼は数えてまだ六つの時から、既に走ることの虜になっていた。その時は、いつしかこの道の

終わりまで行くのが夢だった。彼はそこにはきつと違う世界があると信じていたから。

「かあちゃん、犬助見なかった？」

押入の襖を開けて中を見回しながら、少年は母親に叫ぶ。

犬助とは少年の家で飼っている犬のことである。犬のくせに姉である和美の風呂を覗くから、犬と助平をくつつけて犬助だ。

先ほどから、ずっと家の中を探しているのだが、全然見つからなかった。

「いっちゃんさきに車に乗ったで？春ちゃんが臭いんと違ったん？」

そう言つて、母親は一人くつくつとテンポの悪い笑い方をする。母親は良く笑う人で、何か一人で言つては笑っている。

「何くだらんこと言つとるんじゃ！千春もお前もさつさと乗れ！」
玄関の外からクラクションの音が響く。

「五月蠅いわ！あんたのパンツがバッグに入りきらんのじゃ！せかすなら全部履いていきー！」

母は負けずに怒鳴り返す。

「千春！あんたはさつさと乗りんさい。はよいかんと、父ちゃんのパンツ被せるで？」

少年は急に青ざめて、いややと何度も繰り返すと車の中に逃げ込むように乗り込んだ。それを眺めて、母親はまたくつくつと笑っていた。

二つ目のパーキングエリアで休息をとる。

「まだつかんのぉ……？しんどいわぁ」

千春という少年は、ワザとフラフラと歩きながら、トイレから父親と出てくる。

「我慢せい。向こう行けばでっかい家が待つとるんじゃ」

千春はその何度も聞いた父親の言葉に、目を輝かせた。やはりそれも何度目かであるが。

今日から千春達の家族は、東京に住むことになる。今まで住んでいた田舎を出て、日本の中心都市である東京に引っ越しをするのだ。父親は運送会社に勤めていた。しかしトラックなどの運転ではなく、デスクワークが中心だったのだが、この度、本社の課長として本社から抜擢されて、本社のある東京へと向かっている。

「ほら、さつさと車に戻るぞ。姉ちゃんが待つとる」

父親はそう言うのと、さつさと車に戻りはじめる。千春はそれについて行くには、小走りになる必要があった。

「なあなあ？向こう行ったら、沢山走れるのじゃろうか？どうなんじゃろうな」

父親はそれにたいして何も反応をしなかった。千春も別に反応を待っていたわけではない、ただ自分の疑問を聞いて欲しかっただけだった。

東京は僕らの町から車で四時間かかる。かれこれ二時間半は車に乗っている。

「なあ、東京いつでも住む場所ってどこ？」

和美が車の後部座席で、怠そくに窓に頭をつけて尋ねる。千春は和美を振り向いた。

「あのな、区なんじゃ！知つとるか？23区じゃ！！すごいもの。初めてじゃ！区って僕のところにはなかったしのお」

千春が少し自分が利口な気がして、自然に笑顔が出た。

「お前は馬鹿？あたしが聞いているのは、地名！別に区がなんとか聞いてないし」

和美が冷たい目で千春を見る。千春はムスツと黙って、そのまま前に顔を戻した。

「なに弟に突っかってんじゃ！！世田谷区つてどこじゃないかね？」

母親が助手席から和美にさらりと答える。しかし和美はそっぽを向いてふーんと言ったきり、黙り込んでしまった。

千春は知っていた。何故、和美の態度が悪いかを。

千春は段々と瞼が重くなってきたのを感じた。そのまま少しだけ目を閉じた。千春はそのまま深い闇の中に落ちていった。

第2話：続・東京へ（前書き）

更新が物凄く遅れてしまいました。

これからは合間を縫ってちょいちょい更新します

第2話：続・東京へ

いつの間にか前の家の中に千春はいた。家の中は真っ暗だった。台所からだけ灯りが出ていた。

「絶対にいかん！東京なんて絶対嫌や！！」

台所から和美の怒鳴り声が聞こえる。それに続いて父親の怒鳴り声も聞こえた。

「黙らんか！！まだ親に食わして貰ってる分際で生意気ぬかすな！」その後にはバチンツ！と何かを叩く音が響いた。

「あんた殴らんでもいいでしょ！！和美大丈夫？」

母親の優しい声が聞こえる。だけどその後には憎悪の声しか聞こえなかった。

「もうやめてえな！！お父ちゃんも姉ちゃんも！！そんなんなら僕もう引越して嫌や！この家も嫌や！お父ちゃんも姉ちゃんも大っ嫌いや！！」

自分自身の声も台所から聞こえた。ああそうか、これは夢なんやな。この夢には見覚えがあった。引越しが決まったその夜の夜に姉ちゃんとお父ちゃんがケンカをしたのだ。僕はケンカが嫌いだった。相手を傷付けるという行為も相手に傷付けられる行為もどっちも嫌いだった。

この日の夜遅く、みんなが僕が寝たと思っていた時間に3人でひそひそと話し合いがあった。それは僕のことだった。声が小さくて分からないこともあったが、母ちゃんの口から「お姉ちゃんなんやかな？」と言うのが何度も聞こえた。

そして父ちゃんはあまり声を出さなかった。姉ちゃんは本当はとっても優しい人だ。気難しくて、よく僕を怒るけど、普段は優しい姉ちゃんだから、姉ちゃんは「千春に迷惑かけたくない…我慢する」というと居間を出ていった。

最後に父ちゃんから「すまん…」というのだけは聞こえた。

「千春おきんさい！」

お母ちゃんが僕のももをバチバチと叩く。僕ははじけたような痛み
に気分悪く目を覚ました。

「あれ…？僕寝取ったん？もうついたんか？」

目をこすりながらまだハッキリしない視界で車から外を見回す。

「もうすぐだよ。もう高速から降りるって」

姉ちゃんの声が横から聞こえたので、僕は横を向いた。姉ちゃんは
さつきより機嫌が良くなっていた。僕はその人の表情を見るだけで
大体の機嫌が分かる。

「ガム噛む？」

姉ちゃんが僕に一枚渡してくれた。それを口に放り込んで噛むと物
凄い辛みが口を襲った。

「なんや…こへ…めっちゃ辛いやん…」

僕は思わず涙ぐんでしまった。姉ちゃんは少し楽しそうにフフと笑
うと、いたずらっこな目で僕を見た。

「どう？すっかり目醒めた？寝ぼけていきなり車飛び出されても困
るからね」

姉ちゃんはわけのわからんことを言っただけでまた笑うと、僕とは逆の窓
の外を見始めた。

「高速おりるで…」

前で父ちゃんがぼそりといった。

僕はハッキリした目で外をみた瞬間じんせいで初めてというほど驚
いた。辺り一面はでっかい建物でいっぱいだったのだ。僕がいた町
の一番でかいと言われた高層マンションなんて比べ物にならないほ
どの建物がいっぱい並んでいた。

「あわあ…」

僕は声にならない声で感動を表した。誰かにこの感動を伝えたかつ
た。姉ちゃんの方を見るがまだ外を見ている。母ちゃんと言いかけ
るが母ちゃんはなんだが化粧を直している。父ちゃんと言う前にあ

きらめた。

僕はこの感動をそっとしまっておこうと思った、自分しか知らない
ヒミツが出来たのでちょっと嬉しくなった。

少年の物語はこの東京から始まった。

第3話：両手の物

「千春ッ！！はよ起きなさい！！また朝飯食べれんやんか！！」

とある一軒家の一室から大声が響き渡った。その後にはビシともバシとも聞こえそうな痛々しい音が聞こえてくる。

「痛い！分かってるよ！もう起きるって！！……ちっ」

僕らは今年でここに引越して5年になる。僕はしょう学6年になった。和美姉ちゃんは中学3年になっている。専ら生意気になった僕はいつも遅刻ギリギリまで布団にくるまっている。

姉ちゃんも父ちゃんも既に学校と会社へと向かっているが、僕はやつとのつそりと布団から這い出てきた。

「……やべえ……。今日は陸上クラブの朝練やん……」

僕はそつこうで着替えを済ませると、ボロボロになったランドセルを担いで玄関に滑り込む。

「ちよつと！こらっ！千春！！寝癖ぐらい直しておきんさい！！」

後ろから何故か両手にブラシを持って追いかけてくる。僕にとってはこれがかんりの恐怖だった。

「そんな時間あらへんわっ！！行ってきます！！」

僕は学校へ続く道を全速力でダッシュした。

「こらああ！杉本お！！また朝練遅刻か！」

教室で体育着に着替えて校庭に身を小さくさせて行くと、さつそく顧問のデコ橋の怒声が聞こえてきた。

このデコ橋という名前は、まだ30のくせにかなりデコが後退しているという理由から、僕たちの先輩が名付けた名前だ。もちろん本人にはそう言わないが、僕たちの中でデコ橋の名前が挙がる時は絶対にこう呼んでいる。

「すみません……寝坊しました」

僕は正直に本当の理由を告げると、デコ橋の顔をおそろおそろ見て

みる。やはりこの男のデコは広がった…。というのはどうでも良いことなのだ、剣道部でもないのにいつも手に持っている竹刀が上に上がっていく。僕の中で警戒信号が発令される。

「一度これで頭殴って目覚まさないダメかもなあ…。？」

僕は一步、また一步と後ろに逃げていく。それを一步、また一步と距離を縮めるように近づいてくるデコ橋。

「暴力は行けませんよぉ！！高橋先生！！」

僕は軽いフットワークでデコ橋をかわすとそのまま陸上クラブの輪の中に逃げ込んだ。

午前の授業も終わり、給食の時間も含まれた昼休みに入った。この時間はたいがいは給食の後は仲間同士で校庭でドッジボールをしたり、鬼ごっこをしたり遊ぶ。

「ちいゝ？今日は何する？」

ちいとは僕のことである。千春の千を伸ばした呼び方だ。僕はこの呼び方は嫌いではないが、女の子みたいで少々気に入らなかったりするときもある。

「んゝゝ、鬼ごっこしようよ」

数人の仲間からオツケーという声が聞こえてくる。そしてみんなで校庭に出ようとした時に、僕だけ前に進むことが出来なくなってしまう。

「千春くん！今日はお掃除当番だよっ！！」

軽いショートカットに目が少しおっとりしていて、鼻立ちが幼いながらも綺麗な女の子が箒を両手に目の前に現れたのだ。この子の名前は小坂 由香という。僕が小学1年の時に転校して依頼、ずっとクラスが同じ女の子である。

顔は可愛いのだが、性格がしっかりしていて男子からは嫌がられるコトも多い。

「うつゝ忘れてたわゝ。すまん！根本！みんなに掃除終わってから行く言うといってくれ！」

僕は少し焦ったりすると、昔の土地の方言が少しでてしまうことがある。

根本という男子はわかったと言うと、そのまま校庭へと降りていつてしまった。僕はその背中を見つめて、自分勝手ながら友を見捨てるなあ！と心の中で叫んでしまった。

第4話：学校で

学校が終わり放課後になる。先生から解放された僕たちは、一目散に校庭に駆けていって遊び始める。

最近の僕たちのブームはソフト野球だ。プラスチックのバットと柔らかいゴムボールでの野球で、ツアウトチェンジ式の野球だ。

「次のバッターはちいだぞお！バントに警戒しろお！！」

キャッチャーが野手達に叫ぶ。僕はこの学校で一番足が速い。自慢じゃないが、駆けっこで一位以外をとったことがないのだ。僕はピッチャーが投げる球をうまい具合にバットに当てて転がす、三塁方面に転がして、一塁に投げた時には既に僕は一塁に立っている。

僕はこのソフト野球で盗塁王にもなっていたのだ。次にピッチャーが投げる時には二塁に向かって走っている。

試合の結果は散々だった。根本と校門を出て話しながら帰っていた。「ああーあ、僕がいつも出塁するのに…なんで打線が続かないかなあー」

僕のチームはいつも負けてしまう。あの後は根本が三振にされ、続く打者もピッチャーゴロでアウトになった。

「まあまあ、盗塁王になってるだけイイじゃん？」

とかいっている根本は三振王なのだ。

「あつ！連絡帳を教室に忘れてしもうた！根本！悪いっ！先に帰っててくれ！」

根本の「ちよっと…待てよ」を聞かずに僕は走って学校に戻っていた。

「なんやあ…夕方の学校って薄気味悪いのお…。さっさと取って帰る」

僕は教室に続く階段を一段飛ばしで登っていった。リズムよく登っ

ていたのだが、階段の折り返しでなにかにぶつかって、尻餅をついた。

「おわあっ！」

「きゃっ！」

僕は転んだことではなく、目の前にいる人に驚いていた。

「なんで…小坂がおるんや？最終下校過ぎたで？」

僕は驚いて目を丸くしている小坂に手を差し伸べながら聞いた。しかし、小坂はその手を握って立ち上がると、そっけなく答えた。

「別に…。千春くこそ何してんの？」

僕は連絡帳を取りに来たことを伝えると、一応小坂に怪我はないかを聞き、小坂の横を通り過ぎて階段を登り始めた。

「ちよつと！…待ってよ！」

小坂が僕が階段を登ろうとするのを阻止してきた。僕は背中を引っ張られてよろける。

「ん？どうしたの？」

僕は小坂が泣きそうな目をしているのに気づいて、教室に見られたくない物があるんだろうと思った。だから僕は余計教室に行きたくないだったので、小坂の手を引いて一緒に教室に向かった。その間、小坂は嫌だ行きたくないを繰り返していた。

「これ…誰がやったの？」

僕は驚きと怒りのあまり喉に空気が通らずうまく声が出せなかった。

小坂は僕から目を背けると、静かに涙をこぼし始めた。

小坂 由香の机に色々なマーカーで沢山の悪口が書かれていたのだ。小坂はちよつと口うるさいが、嫌われるような人ではない。僕は腹の底が握られた様にいたくなった。これほど気分の悪い物は今までになかった…。と思った。

「とりあえず…消そっか」

僕は雑巾を絞って、机をゴシゴシと拭く。幸い二十分ほどで全部綺麗に落ちた。その間、小坂は泣いていたが、多少落ち着いたのか僕

にお礼を言ってきた。

「あり…がとう」

「大丈夫だよ。小坂…もう平気？」

小坂は小さく頷くが、まだ小刻みに身体が震えていた。

第5話：嫌な奴ら

あの夕方の学校でのことは僕と小坂しか知らない。先生に言うつもりもないし、友達にも親にも言うつもりはなかった。しかしあの日のことは、今でもずっと僕の中で嫌な気分にした。

小坂とは六年になっても同じクラスで、あの一件以来よく話すようになった。家も同じ方向でたまに一緒に帰ったりすることもあったが、クラスの男子にそれを見られて囁し立てられてからはあまり一緒に帰ることはない。

「千春くん！ちょっと待って！」

僕が一人で帰ろうとしていたところを小坂が呼び止めてきた。僕も小坂もこれから受験をするため同じ塾に通っている。そういう時は帰りも遅くなるので一緒に帰れと親から言われているのでいつも一緒に帰っていた。しかし、今は学校帰りであって塾帰りではない。それに僕はこれから塾の前の昼寝をしたい、小坂と一緒に帰る時はいがい小坂の家の前で長話になってしまう。僕はちょっとしかめっ面を意識して振り返った。

「一緒に帰ろうよ！待ってくれても良いのになあ……」

小坂は頬をぷくつと膨らますと、僕の横に並んで歩き出した。小坂は僕のことを千春くんと呼ぶが、僕はずっと小坂と呼んでいる。小坂は別に名前でも呼んでも良いよと言うんだけど、なんだか僕の学校には男子は女子を苗字で、女子は男子を名前でという知らないウチにルールが出来ていた。だからずっと呼ばないでいる。今もちょっと小坂はその話を僕にしているところだ。

「変なルールだね？なんでだろうね？男子ってそういうの恥ずかしいの？」

でた……。質問攻め。僕はこの質問攻めが苦手だった。どんな簡単な質問にも答えられなくなってしまうのだ。そしてそれは家までずっと続いた。

「ただいま…」

ため息まじりに家へ帰った。最近受験が近くなったせいで最後の追い込みとかでも物凄い量の課題を出される。今日もそれをこなしてきたのだ。そしてたくさん宿題プリントを貰った。

「溜息は幸福が逃げるよ？」

ソファーに寝転がりながら雑誌を読む姉がこちらに目も向けずにそう言った。姉は去年受験を終えて見事私立の名門高校に合格したのだ。しかし、僕は姉が勉強している姿を見たことがなかった。部屋はとなりなのだが、いつもソファの上で何かしている印象しかない。しかしテストでは学年トップクラスの成績を出している。僕は絶対になにかインチキをしていると思っっている。僕の親から受け継いだ血で天才が出来るはずがないと確信しているからだ。

僕はさっさと宿題を片づけようと思い、自分の部屋へと向かった。ドアを開けると目の前にはベッドがあつて、その枕の横に机がある。僕は机に向かって勉強を始めた。

「おはよう…」

僕は眠くてまだ霞む目を擦りながら食卓へと向かった。僕の家は朝は絶対にご飯とみそ汁で決まっっていて、パンなんて滅多に食べない。僕はすでに机に準備されている自分のご飯とみそ汁を頂いて、洗面所に向かった。

午後のチャイムが学校に響いた。友達にじゃあねと手を振ったり別れを告げていると、同じクラス的女子に声をかけられた。そして言われるまま教室を出てあまり人の来ない隅っこの空間に行くと、そこには数人の女子がいた。

「なに…？」

流石に僕も男が一人という状況に怯んまずにはいられなかった。その中のクラスでもリーダー格の女子が僕に少し強い言い方をした。

「杉本くんってさあ…。由香のこと好きなの？」

僕は言葉が出なかった。小坂を好きとか誰が好きとか思ったことが僕にはなかった。この前行った修学旅行でも男子同士で好きな人は誰かと言う話になったときも、僕はそういうのは全然わからないと正直に言っただ程だった。もちろん僕は首を横に振った。

「じゃあさ、仲良くするのやめてよ！あの子ってわがままだし、うるさいしうざいから」

またしても言葉が出なかった。次は驚きではない、あの日と同じ腹の底を握られるような怒りがそうさせたのだ。別に誰が誰を嫌いになったって、好きになったって僕がかまわないと思っっている。だけど、これはそういうのとは違った。きっとこの子以外の子は、この子がそう言うなら…、とかみんながそうだからとかそんな理由で小坂を一人にしようとしている。そう考えた時、既に周りの女子から悲鳴のような声が上がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3933b/>

ブランコのある公園

2010年11月13日20時47分発行